

2020年 学校関係者評価
報告書
(2019年度)

学校法人滋慶学園
東京スポーツ・レクリエーション専門学校

作成日：2020年6月9日

学校法人 滋慶学園 東京スポーツ・レクリエーション専門学校
2020年 第1回学校関係者評価委員会議事録

議事録作成者：中村 裕子

1. 開催日時 2020年6月9日（火） 15:30～17:30
2. 開催場所 東京スポーツ・レクリエーション専門学校
3. 参加者 **学校関係者評価委員 ※敬称略**
白川 創一 業界代表（株式会社F 代表取締役）
新井 二郎 保護者代表（スポーツビジネス科）
西 実伸 近隣関係者（江戸川区アメリカンフットボール連盟 副理事長）
阿部 幸夫 卒業生代表（スポーツトレーナー科(スポーツヘルス科)）
前田 弘 業界代表（公益社団法人 日本サッカー協会 アスレティックトレーナー）
坂井 伸一郎 業界代表（株式会社ホープス 代表取締役）
森 章 高校関係者（拓殖大学紅陵高等学校 学校長）

学校側参加者

関口 正雄	東京スポーツ・レクリエーション専門学校	学校長
後関 慎司	〃	副学校長
中村 聖之	〃	事務局長
植田 慎司	〃	教務部長

<自己点検・自己評価委員より参加>

高橋 理	東京スポーツ・レクリエーション専門学校	キャリアセンター長
真田 信	〃	広報センター長
中村 裕子	〃	学生サービスセンター長

4. 会議の概要

(1) 学校長挨拶

コロナ禍により学生のための臨時対応の奨学金等が幾つかあるが、大学向けのもが多く、専門学校が同じ土俵にはなかなか上がれない状況である。

国立大は国が学校での減免額を負担。私立大では2/3を負担。専門学校は今のところ無し。専門学校の地位向上が大切で、そのためにも職業実践専門課程は重要な取組みである。

コロナの影響で4、5月は遠隔授業を実施した。既存の制度上では双方向の実施が原則だがオンデマンドも認めることとなった。これによりストックされた映像を各自好きな時間に見ることが可能になると社会人の学ぶ幅が広がるのではないかと。職業実践専門課程では企業との連携が重要となり積極的に企業における実習を実施しているがままならない状況である。学内の演習を置き換えても可能と言われているが、果たして実習の代替えとなる内容が学内で可能なか課題として残るところである。このような教育環境となっているが、委員の皆さんには学校の取組みを評価し、積極的なご意見をお願いしたい。

(2) 各委員の紹介

・新委員のご紹介

保護者代表 スポーツビジネス科の新井さんのお父様が就任となる。

・業界代表 株式会社ホープス 代表取締役

(3) 2019年度自己点検・自己評価報告と2020年度重点目標について

・別紙、評価表を参照し各担当者より報告。

(4) 委員からの意見

・今年度の入学者減少はコロナだけの影響なのか。

学校認知のために学校の様々なコンテンツの発信が必要だった。

・スポーツの世界は厳しい。人間的な強さと柔軟性を学べれば良いと思う。

CLUB-TSRでの実学教育では人間教育もする場としている。

・入学者が減少してしまった場合の募集はこれまでの募集と変えていかなければいけない。高校生減少の対策として、リカレント教育に力を入れてはどうか。社会人向けの教育に力を入れている。社会人は公的制度を利用して入学するケースもあり数年前から整備をしている。今回のコロナ感染拡大により遠隔授業が急激に進み、今後の社会人や大学生対象のコンテンツが更に進んでいく。

・災害時の安否確認は徹底できているのか。携帯繋がらないときの取組みは。

やはり人海戦術となる。安否確認システムを利用しても完璧ではない。繋

がるまで学生や保護者に連絡を取ることをやり尽くす必要がある。

- ・コロナにより、実習がうまくいっていない業界が多いが学内でどの程度、カバーできるのか気になる。いったんストップしている実習を、学生自身がオンライントレーニングなど自分で考えて発信していくことで実技を自分の力にしていけるのか。

確かに実践力に不安が生じるが、逆にこのような状況で自分で考えて情報を取る、情報を発信することが学生達にとって日常では体験できない経験となり力となるのではないか。

- ・コロナの第2波に備えていることはあるか。

現状実施している分散登校、同時配信、オンデマンドでのすべての授業の録画を必須とし、いかなる形態でも教育を保障する義務がある。

- ・リスクマネジメントの部分でSNSリスクを避ける対策は。

ITリテラシー確認テストおよび担任授業で教育はしているが、実習先で選手の情報、チームの情報漏洩を防ぐ為に実習前教育を行っている。また、実習時には誓約書にSNSに関しての項目を盛り込みリスク回避をしている。

- ・専門学校的位置付けは、資格取得、プロフェッショナル教育と捉えている。自立自走型の人材育成カリキュラムは今後学校が取り組むテーマなのは。

学生が自ら考え自ら取り組む力を身に付けるためにJSAの学内プログラムの運営や外部トレーナー活動出で顧客満足を考えPDCAを回す教育が他の学校種とは異なる教育だと思っている。

- ・急速な国際化が進む。もっと国際教育の機会を作るといいのではないか。海外研修は外国の空気を感じるにはいいが国際教育と言うにはもの足りないと感じる。

参加が強制ではないので、学校としてもグローバル教育と位置付けるには新しい取り組みが必要と感じている。4年制学科ではカリキュラムに海外での活躍を意識できるような教育を取り入れることを検討している。

- ・4大学生は就職活動で苦勞をしている。卒業後に何をしたいのか意思がないまま就職活動をすることが理由である。

- ・スポーツビジネスに特化することは、今の時代にマッチしている。日本の教育は新しいものを率先してやっていく取り組みが少ないが、スポーツは日本でもっと普及し日常化するだろう。TSRの学生が新しい発想で新しい市場を開拓し、我々が考えつかないことを考えつく可能性がある。

多様化する学生、スポーツ現場に対応できるように学生の興味や希望進路に応じて履修できるように単位制授業としている。我々も学生、卒業生の活躍の場が増えることに期待をしている。

5. 閉会のあいさつ 副学校長

来年は有事の報告となる。今年度のコロナ禍による教育現場の大きな変化に我々がどの様に対応しどんな結果が出たのかについて、いい報告ができるように気を引き締めて取り組んでいきたい。